



聖書と聖体

人となられた言(ことば)に

生かされて

長崎大司教 高見 三明

(一)

ペトロ岐部と一八七殉教者の列福式は感動と感謝のうちに終わりました。今後その意義を生かすことが大切です。

ところで、禁教時代の信徒たちは、司祭にも聖書と聖体にも恵まれない中、ひたすら洗礼と教えと典礼曆を守りながら信仰を生き、伝えました。しかし、教えや祈りの中に神のことが聞き、洗礼の中に神の業を体験したのではないのでしょうか。

幸いにわたしたちは、司祭も聖書も聖体もいただいています。わたしたちの考え、心、生活態度が、この恵

みによってもっと生かされるようにしなければなりません。

(二)

去る10月5日から26日まで、バチカンで、「教会の生活と宣教における神のことば」というテーマのもと、世界代表司教会議(シノドス)第12回通常総会が開催されました。

会長の教皇様を中心に、枢機卿、各国司教協議会代表ほか、総勢400余名が一室に会して、意見を述べ、熱心に議論を重ねました。この成果は、メッセージとして、また、教皇の使徒

的勧告として、いずれ発表されることになっていきます。

さて、前回通常総会のテーマのように、第二バチカン公会議は、「聖体は教会の生活と宣教の源泉であり頂点である」と強調する一方、聖書を読み、黙想し、生活の糧とするようにとも勧めています。今回の会議で、神のことばの豊かさを強調すると同時に、聖書と聖体が、信仰生活に具体的に、どのように調和よく結びつくのか、という問題も問われました。

(三)

確かに、教会ははじめから「聖体と聖書」という「いのちの糧」で養われてきました。ところがさまざまな理由で、信徒が聖書を手にして読むことはまれでした。

まず聖書は神のことばであるため、解釈は聖職者に委ねられました。またラテン語に訳される400年頃まで、旧約聖書はヘブライ語がギリシア語訳、新約聖書は原文のギリシア語のものが普通だったため、聖職者や修道者以外、多くの信徒は読めませんでした。

さらに印刷術が発明されるまでは手書きで、大変高価だったので、大多数の信徒の手には入りませんでした。印刷技術の導入後、教会を改革し

ようとする人たちが、「聖書のみ」という原則を立て、英語やドイツ語などに翻訳して一般の人々に広めると、教会は、聖書以外に聖伝と聖体の秘跡を以前にもまして強調しました。

(四)

そのため、信徒が聖書に近づく道は、閉ざされたままとなりました。約40年前まで、ミサの式文も聖書朗読も、司祭がラテン語で唱えていたのです。

二十世紀になると、聖書が本格的な学問の対象ともなり、聖書に対する関心がそれまで以上に高まると、第二バチカン公会議(一九六三年〜六五年)において教会は、はじめて公式に聖職者や修道者だけでなく、信徒も含む「すべてのキリスト信者」に、聖書を熱心に読み黙想するようにと、強く勧めたのです(『啓示憲章』25番ほか参照)。

しかしこの勧告は、公会議閉幕後43年になる今でも、全教会で広く実行されているとは言えません。歴史の古いヨーロッパの教会でも同じです。

信徒はもっぱら、要理と説教を通してキリストの教えを学び、ミサと告解、朝晩の祈りによって信仰を養い、ある人たちはさまざま信心会に入り、慈善や使徒職活動にたずさわっ

てきました。これが大方の現状でもあります。聖霊によって人間イエスとられた言(ことば)は、そのことばと業を通して、神の愛を示されました。

そのイエス・キリストは、ミサに現存し働かれます。そこで語り、死んで復活し、永遠のいのちの糧、つまり聖体としてご自分を与えてくださいます。

参加者は、主のことばを聞いた後、同じ方を食べます(ヨハネ6・57参照)。それは、主と同じように生きるためです。

したがって、個人的であれグループの中であれ、聖書を読むことは、神のことばを食べ、咀嚼し、聖霊によって内側から変えられる者になることです。

それは、聖体を通してご自分を与えてくださるキリストの愛を、日々の生活と生涯を通して実践するためです。聖書と聖体を通して語り行うキリストによってこそ、生かされるようになりたいものです

1 『啓示憲章』21番、『修道生活の刷新に関する教令』6番、『司祭の生活と役割に関する教令』18番参照。



Q & A

「列福式からパウロ年

そして神のみことば」



Q. 今年はどこも列福式一色という感じでしたが、同時に「パウロ年」でもあるとうかがっております。こうも次から次へと急ぎたてられると、特に教会の役員の方々は忙しくて悲鳴をあげているのではないのでしょうか。

A. 言われるとおり、次から次と大変ですが、幸いに長崎教区には、優れたコーディネーター(全体のまとめ役)である主任司祭のもと、一人一役を原則とする役割分担をしているので、役員の方さんだけ悲鳴を上げるようなことはないと思います。

確かに最近「・・・年」という名前のついた年が、次から次ぎにやってきました。すると、小教区独自の計画もあるわけですから、その上にまた、やらなければならないことが増えてきて、大変だという感じにならないとも限りません。

しかし、ものは考えようだと、いうこともあ

るのではないのでしょうか。確かに行事をこなすという観点から見れば、できるだけ新しい行事はないほうがよいし、手が省けるといふ考え方にあります。

しかし、そこに、一貫して流れるテーマを追いかける、という意識があれば、そのテーマを追いかけるチャンスは、多いほど良いという、考え方になるかもしれません。

たとえば、信徒でない友だちに、もつと近づきたいという具体的な宣教意識があれば、直接呼びかけるキツカケが、多いほどよいという考え方になるでしょう。わずらわしさではなく、絶好のチャンスとして利用できるようになるのではないのでしょうか。

Q. 「パウロ年」に教区全体で取り組むことはどんなことですか。

A. 教区全体で取り組むこととしては、聖書へパウロの手紙に親しむこと、ローマの聖パウロ大聖堂や、教区内指定教会への巡礼、講演会などと、いろいろ提案されています。そしてそれらをも一つのテーマの下にまとめて、実践しているところがあります。そのテーマとは「福音のために・・・」(1コリ9・23)です。一見平凡なことですが、このことばは聖パウロの、それこそいのかかった覚悟を表したことばでもあります。コリントの教会への手紙にはこ

う記されています。

「福音のためならわたしはどんなことでもします」と。その前にこの「どんなこと」の中身が述べられています。それはすべての人を福音に会わせるためなら、すべての人の奴隷となることもいとわない(9・19)ということです。

ユダヤ人に対してはユダヤ人のようになり、ユダヤ人が一番大事にしている律法に対して、律法のもとにあるものとしてふるまい、他の人に対してはその人の立場に立ち、弱い人に対しては、弱くなり、とにかくただ一点、「福音のために」自分を無にするという覚悟であり熱意です。

Q. 熱意はわかりますが、具体的な形がなければ、熱意も空回りするのではないのでしょうか。どんなことに、熱を入れたらよいのでしょうか。

A. これまでよく言われた熱心さの中身は、主日のミサに与ること、子どものけいこに熱心であること、よく祈りをするなどでした。

もちろん、これらのことはとても大事なことで、おろそかにしてはなりません。しかしわたしたちが、その熱心さを注がなければならぬのは、それらの具体的行為によって、福音的人間を形成する、ということではないでしょうか。

ミサに与ったその帰り道、ずっと人の悪口を言っていた、というような笑話がかつて語ら

れたものです。

主のみ聖なり、主のみ王なり、主のみいと高し、と歌った次の瞬間、自分のみ聖なり、自分のみ王なり、自分のみいと高しという振る舞いへと、みごとに変身するということがあつては、とても福音とは言えないことになりました。熱心さとは、自分中心の囲い込みへの熱心ではなく、すべての人とともにある熱心こそ、聖パウロが追い求めたものです。

Q. 長崎教区は、その辿ってきた歴史によるのかも知れませんが、外に向う教会としては育たなかったと思います。単なる教会維持型教区の段階を、抜け出すことは、難しいのではないのでしょうか。

A. 言われるとおり、一朝一夕で変わることは難しいことです。

しかし時代は、私たちの予想を超える変化を遂げつつあります。内部的には異宗の方々の結婚が普通のこととなり、いやが応でも、自分の信仰を別の見方で、問い直さねばならない状況になっています。つまり、お仕着せのものではなく、自分自身のもの、つまり本物でなければ通じない時代になっています。それにいま、明治維新の時にも劣らぬ、外からの呼びかけが湧き上がりつつあります。

教会群の世界遺産化、巡礼ブームなど、かつ

てなかったほどの関心が、教会に寄せられています。

筆舌に尽くせないほどの苦難の中で、営々と教会を維持してきた先祖たちの苦悩が、今世界から認められる時が来たと言えるでしょう。

「すべての民よ、すべての国よ・・・」という歌に到達した殉教者たちと、その列福式を終えた今「福音のために」譲ってはならないものを掲げ、同時に譲らなければならないものを、見定めなければならない時が来た、考えるべきでしょう。

列福式会場であつたビッグNスタジアムは、北京のオリンピックク閉会式会場であつた、「鳥の巣」のイメージとは異なりますが、いわば福音の巣から188羽の鳩は、勢いよく飛び立っていました。

わたしたちも毎日、あるいは主日のミサからの飛び立ちを、試みるべき時が来ています。

そのためには第一面で大司教様がしたためておられるように、神のみことばを生活の中で味わう実践が、どうしても必要となります。

あまりにも豊かすぎて、主日ミサだけでは味わい切れなかつたみことばを、持ち帰って、夕の祈りの中で味わうとか、食前後の祈りとして唱えてみてはいかがでしょうか。地区集会、家庭集会の分かち合いに取り入れるなど、みことばが人となり、生活となる環境づくりこそ、最優先課題ではないでしょうか。

新しい要理

「共に歩む旅」

(15)



第十二課 「イエスの受難と死」

【進行係】（参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める）

「一人か二人の方が祈りで神さまをこの集いに招いてくださいますか。」

（誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい）

・主よ、この集いにおいでくださり、私たちの心をあなたの愛で満たしてください。
 ・主よ、ここに來てください、私たちの鈍い心を柔らかくしてください。

A. 私たちの生活

【進行係】

「次の文章は第2次世界大戦当時、アウシュビッツ収容所で起きた事件についてのものです。」

どなたか読んでくださいますか。」

1941年7月末、マキシミリアノ・コルベ神父がいた14号監房から一人の捕虜が脱走した。捕虜一人が逃げると、同じ監房にいる10名が見せしめのため餓死刑にされることになっていた。強制収容所の所長は、餓死刑にされる10名の番号を、順番に呼んだが、その中の一人が泣き叫んだ。

「ああ！かわいそうな妻と子供たち！もう会えないのか。」

死刑囚たちは裸足で、刑場へ駆り立てられていった。見るに耐えない残酷な光景の中で、人々は身動きもできなかった。左側にはあの恐ろしい13号監房

があった。黒い壁の死刑執行室、死刑台、そして餓死監房。

そのとき突然、誰もが思いもしない事が起きた。一人の捕虜が、驚いている同僚たちをかきわけて、前に進み出たのであった。マキシミリアノ・コルベ神父だった。

彼は所長の前に立ち、落ち着いて言った。

「あの人の代りに、私が死にます。私はもう年老いていて使えないものにならない人間です。生きていても何もすることが出来ないでしょう。夫人と子供たちがいるあの人の代りに、私が死にます。」

結局その男の代りに、コルベ神父が死の行進の最後に、あなたも屠所に引かれる小羊のように去っていった。

普通、餓死監房は、死刑囚たちの喚きで地獄の様相を呈するのが普通である。しかし、このときは死刑囚たちが喚きたてもせず、呪いの声も浴びせず、逆に歌を唄っていたのである。

コルベ神父は監房の中で一人また一人と死んでいく人々を最後まで見守りながら、祈り、彼らを慰めていた。そして、彼は

死の注射を受けて、大きな目を開いたまま、息をひきとった。

（マリアヴィノフスカ「マキシミリアノ・コルベ」より）

【進行係】（参加者たちに質問する）

①コルベ神父さまは、なぜその人の代わりに引かれていったのでしょうか。

②コルベ神父さまの犠牲で生命を得た人は、その神父さまに對しどんな心を持ったでしょうか。

B. 神のことば

イエスは私たちのために亡くなられました。罪と死の暗やみの中で、生きていく人類を救うために、生命をお捧げになりました。「友のために自分の命をすてること、これ以上の大きな愛はない」（ヨハネ15・13）と言われたみ言葉が、ご自分の受難と死を通して完成しました。

【進行係】

「どなたかルカ23・32・43（十字架に釘づけられたイエス）を読んで下さいませんか。」

・・・聖書を読む・・・

「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

・聖書を読む・・・

「聖書の本文中、心に響く単語あるいは一節を選んで、一人ずつ順番に、祈るような心で、3回ずつ読んでくださいませんか。」

「2分間沈黙し、神が私たちに話されるみことばに、耳を傾けましょう。」

【進行係】(参加者たちに質問する)
あなたに個人的に響いたみことばは何でしたか。自分が選んだ単語あるいは聖書の節が、なぜ心に響いたかをお互いに話し合ってみましょう。

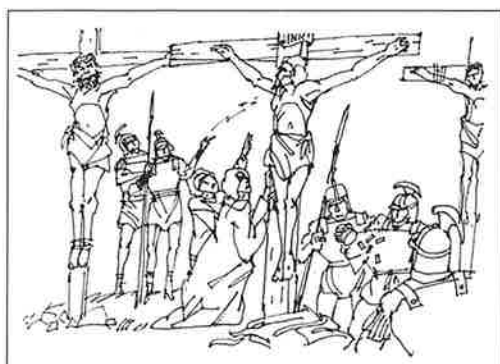
神は私たちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました(Ⅰヨハネ4・10)。そのことによつて、私たちは愛を知りました(Ⅰヨハネ3・16)。
愛のために受難と死を受け入れられたイエス、父なる神を信頼しつつ、委託されるイエスの姿を眺めましょう。

【進行係】

「どなたかマタイ26・36・46(ゲッセマネでの祈り)を読んでくださいませんか。」

・聖書を読む・・・

「しばらく目を閉じてゲッセマネで祈られるイエスの姿を眺めましょう。」



【参考聖書】

*マタイ	27	27	56
受難のイエス			
*ヨハネ	12	24	36
死を予告されるイエス			
*ヨハネ	19	25	30
イエスと彼の母			
*ヘブライ	9	23	28
	10	19	24

キリストの犠牲を通じた贖罪
*Ⅰヨハネ 4・7・12
神は愛でいらつしやる

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

イエスはご自分を殺した人たちに對し、愛で応えられました。イエスは彼らを排斥したり報復したりせず、彼らをゆるして彼らの為に祈られました。イエスさまの十字架上の死は、罪におちいる人間を、限りなくおゆるしになる、神の慈しみを表わしています。

【進行係】(参加者たちに質問する)

①あなたは他の人のために何かを犠牲にした経験がありますか。

それとも、犠牲をさせていると思いますか。

②あなたは家庭、隣人との関係で困難が生じた時、相手のために祈ったり、先にゆるしと和解の努力をしたことがありますか。

【進行係の心得】

*人が愛を知る原点としての受難をしっかりとらえることが大事です。

苦しみが単なる苦しみ、死が単なる死ではなく、同時によろこびであり、いのちなのだということ。それは、泉のように湧き上がる、愛のなせる業であるからという、中心点はずさないことが重要です。

【進行係】

「使徒信条」を唱えながら、この集いを終わります。

【覚えましょう】

44. 使徒信条にはどんな信仰告白が入っていますか。

*12の信仰箇条がこめられています

使徒信条は「主の祈り」と同じく初代教会の時からあった祈り文であり、特に新しい信者が洗礼を受ける時、カトリックの信仰を受け入れるという意思表示として洗礼式の中で公式に捧げます。

「2000年の歴史における 教会像の変遷と司祭の使命」(5)

森 一弘

(東京教区司教)



第39号
第5ステップの教会像
第6ステップの教会像
第7ステップの教会像

第40号
第7ステップの教会像
(つづき)
第41号
第8ステップの教会像
3. むすび

第7ステップの教会像 続き

第7ステップの教会像というのは、あまり取り上げられていないことだと思ふのですが、教会と社会が対立した点がその特徴です。

現代社会を作りあげているものは、自由、科学技術、それに資本主義という経済活動です。近代から現代の特徴は、この3つの柱を無視しては考えられません。

ところがこの3つが芽生えて、新しい社会が形づくられていくとき教会は、その意味を否定的にとらえたのです。

第二バチカン公会議までの教会は、現代社会と対決することになります。まず自由との対決です。自由平等を掲げたフランス革命が起こったとき、そのフランス革命は、ルイ王朝を破壊しただけでなく、ルイ王朝と結びついていたカトリック教会を否定することになってしまいました。カトリック教会は、フランス革命の目標である自由に対して否定的になります。

アメリカの独立宣言に対しても同様です。アメリカ独立宣言の最初の項目にこういふ表現があります。「われわれはわれわれが信じる神において、すべての人間は自由かつ平等であり、幸せになる権利を有していることを宣言する」と。

この独立宣言に言われている「われわれが信じる神」といふ表現には、

実はカトリック教会を排除する意図が含まれています。

プロテスタントの教会が、主流となって独立宣言がつくられておりました。その当時のバチカン側から見ると、アメリカニズムは、反カトリシズムとして映っていたわけです。そしてローマへの従順こそ、救いへの最高の道である、というスローガンを掲げたわけです。

もう一つは、自然科学です。ガリレオなんかの問題が起こります。教会は、合理主義、実証主義の芽生えにより、天地創造についての教えとか、マリア様の処女懐胎、聖変化、三位一体などは、合理的に説明できない、という挑戦を受けることになります。

伝統的な教義を守るために、カトリック教会は合理主義・実証主義を弾圧することになります。

また、産業革命による新しい資本主義が芽生え、そこに出現した労働者たちの問題を、教会はなかなか理解できませんでした。その問題を、単に霊的な問題として解決しようとした。「貧しい者は幸いである」と。

労働者たちの救いとして共産主義が誕生してきます。マルクスなんかは、宗教は貧しい者のアヘンである、と決めつけます。

これらと対決しながら教会は自分

を守ろうとします。勢いを増してヨーロッパ全体に広がる新しい流れにそれぞれの地域の司教たちは、もう自力では対処できなくなってしまう。世界各地の司教たちや信者たちの間に、バチカンを中心に据えて、こういう問題と対決しようとする新しい気運が生まれ、教皇を中心とした中央集権体制が強固になっていきます。

この中央集権を完成させたのが、ピオ9世です。

ピオ9世はすごい人でした。たとえば、バチカンに行くと、水曜日の午前中に巡礼者のための、教皇謁見があります。これを定例化・制度化したのは、ピオ9世でした。

そして世界の主な国のカトリック神学校のうち、一つはローマに置くようにしました。ドイツの神学校も、スペインの神学校もローマにおき、そこで教育された人たちが祖国に帰って、バチカンの息のかかった人たちが指導者として選ばれていきます。こうしてバチカンと世界の教会がしつかりとつながるようになります。

さらに、ピオ9世は、すべての修道会・宣教会の本部を、ローマにおくという制度を作ります。例えばミラノ外国宣教会も、ミラノにあった本部を、ローマに移しました。このようにして修道会も宣教会も教皇の意を汲んで、活動を始めるようになります。

ります。

ピオ9世は、そういう意味では、新しい中央集権制度を確立した人と言えます。現在につながる形を作った人と言えます。

さらに、第一バチカン公会議が開かれ（一八六八年）、反近代主義のローガンが掲げられます。

こうして第7ステップの教会像では、掟や教義が必要以上に強調されるようになります。それも信者たちや教会を世俗の毒から守らなければならぬという使命感からと言えます。

第7ステップの教会像というのは、考えてみると、私たちのごく最近までの動きそのものでもあります。教会の原点にあるものは、この世界のすべての人たちの、悲しみや苦しみを、受け取って動かされた神の心であり、いやしであるところであると、このような対決姿勢ではやっていけなくなってしまう。

ヨハネ23世が教皇の位に着いたとき、このような社会と対決する教会の限界を理解し、これからは社会と対決せず、社会の中に入れる教会に転換しようとしたわけです。

ヨハネ23世が教皇に選ばれたのは、1958年の10月12日ですが、その時から3カ月あとの1月25日に、聖パウロ大聖堂でミサをささげ、そのミサの中で、誰にも相談せず、教皇

は第2バチカン公会議を開催することを発表されたのでした。

私は、教皇の中に教会のダイナミックなイメージがあり、現代人に届くようなメッセージを、発信する教会でなければならぬ、という思いがはっきりとしていたのではないかと捉えています。

第2バチカン公会議を開く前に「世界に平和を」という重要な回勅を出しますけれども、その中で、教皇はこのようなことを言っています。

この世界に平和を築くためには、すべての善意ある人たちが協力しなければならぬ、たとえ共産主義者であつてもという言葉を入れています。

その10年前、第二次世界大戦中、ピオ12世は、イタリアの中で共産主義が現われたとき、共産党員になると、それだけで破門していたのに、その10年後に、ヨハネ23世は、たとえ共産主義者であろうと、人間としての良心を信じ、一緒に社会を作っていくという大きな流れを呼びかけていたのです。

それを受けて、第二バチカン公会議は開催され、すべての人との対話協調を打ち出すことになりました。

現代世界憲章の条文では、「現代人の喜びと希望、苦しみと悲しみはすべて、それはキリストの弟子たちの喜びと希望、苦しみと悲しみであ

る」と宣言し、世界の人々を結び付けようとした。

ここで人間が前面に出てくることになりました。人間の姿が文書の中に出てきて、それを土台として、教会の姿勢も変えようとしている新しい動きを指摘できます。

もうひとつのポイントは、あまり注目されなかったんですが、そのあとの現代世界憲章第44条で、「教会は人類の歴史と進歩から、大きなものを受け取ったことを知っており、いろいろな経験、学問、真理の新しい道は教会のためにも役立つものである」と宣言します。これは、「教会はキリストから素晴らしい真理をもらっているから、教会が世界に教える」という発想ではなく、現代社会も素晴らしいものがある。すべての人は神の子であるから、良心がある。社会の中で、一生懸命生きているすべての人の中に光がある。そこから教会は学ばなければならぬ、というメッセージが込められています。

福音の光に照らされながら、人々を信頼しながら共に歩もう。それがこれからの教会の姿だと思います。

（一部前号と重複しています）



人間の自由



一、「強制収容所を経験した人は誰でも、バラックの中を、こちらでは優しい言葉、あちらでは最後のパンの一片を与えて、通つて行く人間の姿を知っているのである。」（「夜と霧」—アウシュビッツ強制収容所の体験記録より）

二、「あの人の代わりにわたしが死にます」（聖マキシミリアノ・マリア・コルベ）

三、「この処刑のことで気をもまないように願いたい。自ら選び、望みに望んだキリスト者の道だから、むしろ感謝したい」（ガスパル西玄可の、親友である山田の奉行、井上右馬允へのねぎらいのことば）

四、「兄弟たち あなたがたは自由を得るために召し出されたのです」（ガラテヤの信徒への手紙・5・13）

大司教談話室 ⑤



神のことはに照らされて

各自分自身を

見つめなおすとき



Q. 「あなたたちは教えのことが何もわかっていない」、「教えを生きることが大事だ」、また「教えに殉じた人たちが殉教者だ。殉教者に倣おう」などとよく言われます。時々どうしたらよいかわからなくなるのですが・・・。

A. 教会は聖書と聖体によって養われてきました。その聖書は聖伝と共に信仰の最高の基準です。教会の教え、説教、信仰は、聖書によって養われ、決まります。聖書は、信仰の力、魂の糧、霊的生活の泉となる力を秘めています。しかも、慈しみ深い父である神が、聖書を読む人々と会って語り合おうのです。このように聖書はわたしたちの信仰生活の基礎ですから、これまではともかく、これから聖書を読むことからすべてを始めましょう。

《シノドス》 この10月、バチカンで「教会の生活と宣教における神のことは」というテーマのもと、世界代表司教会議（シノドス）第12回通常総会が開かれました。

主な議題の一つは、「どうすればすべての信者が聖書に親しみ、それによって生活を刷新できるか」という問題でした。キリストの福音は「生活を変えるような伝達行為」ですが、現実には、多くの信者の内面まで深く影響を与えていない感があります。

それは、聖書よりも、親から受け継いだ感性、育った環境、受けた学校・信仰教育、長崎の教会独特の慣習などが判断基準となっており、それで良しとしているからではないでしょうか。

教会はキリストの福音に忠実に生きようと努めながらも、長い歴史の間にはわば「腫瘍」のようなものができ、これまで何回となく「治療」を繰り返してきました。

身近なところでは第二バチカン公会議とその後、教会の動きがそうです。とくに魂の「腫瘍」を治し健康を取り戻す妙薬は、まず聖体と聖書です。

聖書について公会議は、神のことはに奉仕する聖職者、修道者はもちろん、すべての信者が祈りながら聖書を読むことを強く勧めています。

ですからとにかく聖書を読まなければなりません。そうしなければ、神のことは働かないからです。この神のことはに生かされる教会を目指すのが小共同体づくりです。

《列福式》 列福式の準備をする中で、殉教者の物語を読み、聞き、巡礼して祈り、「殉教者の信仰に倣いましょう」と呼びかけ合いました。感動もし、考えさせられました。そして待ちに待った列福式を目の当たりにし

て、感激で涙しました。

これら一連のことは確かに信仰の財産です。では、生き方に変化があるでしょうか？殉教物語に感動した人たちに、では巡礼地の草をとりましょう、評議会に参加しましょう、聖書を読み生活を変えましょう、と呼びかけても、応えが鈍く重いのはなぜでしょうか。口では「はい」と言いながら、実際には自分の都合を優先して神の望みを「実行しよう」としないからでしょう。

神様に「行い」によって「はい」と応えたいのが殉教者ではなかったのでしょうか。

《パウロ年》パウロは、初め「イエスの名に大いに反対すべきだと考えて」（使徒言行録26・9）教会を迫害しましたが、復活したキリストに出会い、啓示を受けてから、滅ぼそうとしていた信仰を今度は福音として知らせるようになりました（ガラテヤ1・23）。それは、キリストの十字架上の死と復活に神の愛を見たからです（ローマ5・8・8・35・39）。

そのため、キリストからいただいた神の恵みの福音を力強く証しすることができさえすれば、この命すら惜しいとは思いません（使徒20・24参照）、主イエスの名のためなら死ぬことさえも覚悟しています（使徒21・13）、と言います、その言葉通り殉教しました。

彼の宣教活動は、「わたしたちに与えられた神の愛への一つの応答」でした。わたしたちも、キリストという福音に触れて新しくされ、それをすべての人に伝える人になりたいと思えます。



ペトロ岐部にたどり着く ある不思議な出会い



ここに、セピア色した一枚の集合写真があります。

写真の隅っこに「文芸部室」と読み取れるポスターが貼られているので、私の高校時代の写真だとわかります。しかし、これは何かの記念写真なのに、なぜか11名の女学生は視線が一つところを見ていなくてばらばら。これは、昔も今も変わらない多感な高校生の思春期真っ只中の心のありようが見て取れて、忘れてしまっていた大昔の私を思い出してしまいました。

しかし、この写真の中に、ただ一人、口をきりっと結んで遠く真正面を向いている人がいます。

この人は高校一年生で私は高校二年生。私たちは1964年、純心高校の文芸部で出会い、その時私は、彼女の話で、古いキリシタン時代に「ペトロ岐部神父」という方がおられたという事を初めて知りました。

この人の名前は「岐部喜美子」と言いました。彼女は、私がカトリック信者だと知り、すぐに、どうして自分が親元から離れて淋しい思いをしてまでも、長崎の高校に来る事になったかの理由を話してくれました。こんな話でした。

「あるとき、大分の国東半島の田舎も田舎と言えるところにある自分の家に、外人の神父様（チースリク神父様）が来られ、あなたのところは、古く江戸時代にキリシタンとして殉教された岐部神父にゆかりがあると思われるので、調査をさせてほしいということだった。その時、父はびっくりして、このあたりの先祖は、場所柄、周坊灘の海賊だったのでと言いながら、家のなかにあった開かずの間を調査に解放したら、やはり神父様が推測されていたように、岐部神父に関係する系統ということがわかり、この辺りは昔キリシタンがいたことを話され、それで神父様は、父に熱心にカトリックのことを話され、娘である私に長崎のカトリックの学校に行くようにと進められた。・・・ここにいることは、自分の思いではないのだけれど」

彼女の話が本当にあったことだと思えたのは、私も、父から度々「先祖は250年密かに隠れて信仰を守り続けて、明治初めに旅に流された」という話を聞かされていたことがあったからでしょうか。その時、彼女にもキリシタンの血が流れているのだと私は思いながら、彼女が話す、チースリク神父様から聞いた岐部神父様のことを感心して聞き入ってしまったことを思い出します。

彼女は寮生活で、それも簡単には帰省できないことで、淋しい思いをしていましたが、自分が長崎に来ている意味も良くわかっていました。

こんなことで、彼女から、シスターのお勧めもあり、カトリックの勉強を始めたと話があり、その後、思っていたより早く、受洗の話が出だしたのは、その翌年に長崎教区で信徒発見100周年の大きなお祝いがあり、その準備が進んでいる頃でした。

私のなかには、先祖が浦上のキリシタンだったということがあり、信徒発見100周年のお祝いの日に、彼女が洗礼のお恵みをいただけたらいいなと思っていました。

だんだん、彼女の言葉の中に、長崎に至るまでの自分の深い思いや、岐部家を代表しての受洗ということが多くなり、彼女が大人びて凜とした雰囲気を見せるようになりました。懐かしい写真は、今思うときとその頃のものではなかったのでしょうか。

彼女は、大勢の人の祝福を受けて、信徒発見100年に当たる1965年3月17日大浦天主堂で受洗されました。その時、私は、姉妹のようなつたない代母としてでしたが、岐部家の記念すべき日に立ち合わせていただきました。

高校卒業後は、遠距離に住んで会うことはありませんでした。しかし、ペトロ岐部と187殉教者の列福調査がカトリック新聞で記事になるようになった頃から、もう45年前にもなる、彼女から初めて聞いた、「岐部神父」のお名前がどんどん私の中にふくらみ、この方のことを、彼女と語りたと思うようになりました。

彼女は、今、関東在住ですので、私は上京した折に時々お会します。会うと、彼女は、ペトロ岐部神父が守りぬいた同じ信仰を自分もいただいていることに清い心で感謝されます。こんな彼女のお話に対して、代母の私はいつも神様に文句ばかり言っているの、今となれば負うた子に教えられ、信仰のお恵みを分けていただいている感があります。

45年前のあの時、私が初めて知った名前「岐部」がこの年「ペトロ岐部と187殉教者」と教会に大きく掲げられ、それを見る度に、彼女とのえにしはここにつながっていたのだと、心から感謝を捧げた11月24日の列福式でした。

林 絹子



兄弟愛の実践

一菜募金

長崎教区評議会

A. 募金の始まりと趣旨

(1) 島本大司教様の呼びかけ

一菜募金は1991年、故島本大司教様の呼びかけによって開始されました。それは、従来、教区内には災害時に緊急支援する基金等は備えておらず、対応の遅れを指摘されていたからです。そこで、当時の信徒の活動組織であった、教区信徒使徒職評議会に対し、国内外の災害発生時に、早急に対応できるようにするための、募金活動を提案されました。その結果として、災害発生時に即応できる「救援基金」が考えられました。これを受けて当評議会は、兄弟愛の実践として、年間を通して募金活動に取り組むことにし、「災害等救援基金」を設けることにしました。以来、この活動は、長崎教区内全信徒の家庭での取り組みとして、支援活動の輪を広げつつあります。

(2) 兄弟愛の実践のため

具体的な募金活動としては、教会入口などで、声高らかに呼びかけて募金をお願いする

のではなく、各家庭に募金のための缶を置くという形で実施されています。毎週金曜日の「償いの日」に、その日の一食のうちから一菜分を犠牲とし、その一菜にかかるお金をその缶の中に入れて、ある期間まで貯めることにしております。小教区毎に決められている集約日に、それを各自で教会に持って行き、教会でまとめて教区評議会へ送金します。これを「救援基金」とし、兄弟たちへの愛の実践として、災害に素早く対応することとしております。その募金方法に因み、一菜募金、カンカン募金と呼んでいましたが、現在では、「一菜募金」という呼び名に統一しています。

B. 経緯と今後

「一菜募金」は、これまで国内外の数々の災害等の救援・支援を行い、確かな実績を挙げてきました。(表1参照)。

元長崎教区信徒使徒職評議会は、信徒使徒職活動の一環として、かつ、愛の具体的実践として年間を通して、募金活動に取り組んできました。ところが、2006年3月、長崎教区信徒使徒職評議会は、教区評議会へと発展的解消となりました。

しかし、一菜募金活動は、教区評議会が引き継ぐこととなり、これまでの活動による募金残高の全ては、教区評議会に引き継がれています。なお、運用については、元長崎教区信徒使徒職評議会による一菜募金運用規定に準じて行い、今後、必要であれば、教区評

議会として、新たな運用規定を設けることになっていきます。

C. 募金活動についての留意事項

1. 小教区での一菜募金活動への取り組み

各家庭に募金箱を置き、毎週「償いの日」に、一食のうちから一菜分を犠牲として募金箱に入れ、ある期間まとめて教会に持って行き、教会でまとめて(年4回位)教区評議会指定口座に送金する。

2. 募金送金(振込み)についての注意点

● 評議会への振込みは、郵便振替払込取扱票のみをもって行い、現金取扱いは厳禁とする。

● 「一菜募金」は、専用口座を設けているため、口座番号を確認のうえ、必ず教会名を記載する。

3. 募金集計報告

一菜募金集計は、3ヶ月毎(4~6月・7~9月・10~12月・1~3月)の年4回とし、その報告は集計毎に、役員会および総会時に行う。但し、年間合計については、3月20日までに振り込まれたものまでとし、それ以後は翌年度分とする。

4. 支援先

① 教区内信徒や小教区で支援の必要が生じた場合(例: 火事、災害など)は、地区評

議会で審議し、申請書（被災状況や支援理由など）を教区評議会へ上げることとする。

②災害発生の際、ニュース、カリタスジャパンや地区からの要請などを役員会で審議し、支援先・支援額を決定し、会長の決裁を得て送金手続きを行う。

5. 支援報告

支援先、支援日時などについては、適宜「よきおとづれ」や教区評議会を通して報告を行う。また、年度の支援先等の一覧は、教区評議会総会資料に添付する。

6. 会計および会計監査

①会計業務は教区評議会会計が当り、募金収支決算報告は、教区評議会総会資料に添付する。

②会計監査は、教区評議会会計監査が当たる。

D. 献金依頼の負担緩和のために

いま小教区現場では、つきからつきに献金依頼が舞い込んでいます。カリタスジャパンから、教区本部からなど、呼びかけ主体も様々です。

愛の実践という、教会の本来の活動であるので、素通りすることはできませんが、現実には負担が重なっていることも事実です。そこで、普段の実践からプールされたもので臨機応変に対応できたら、いくらかでも現場の負担が軽くなるのではないのでしょうか。

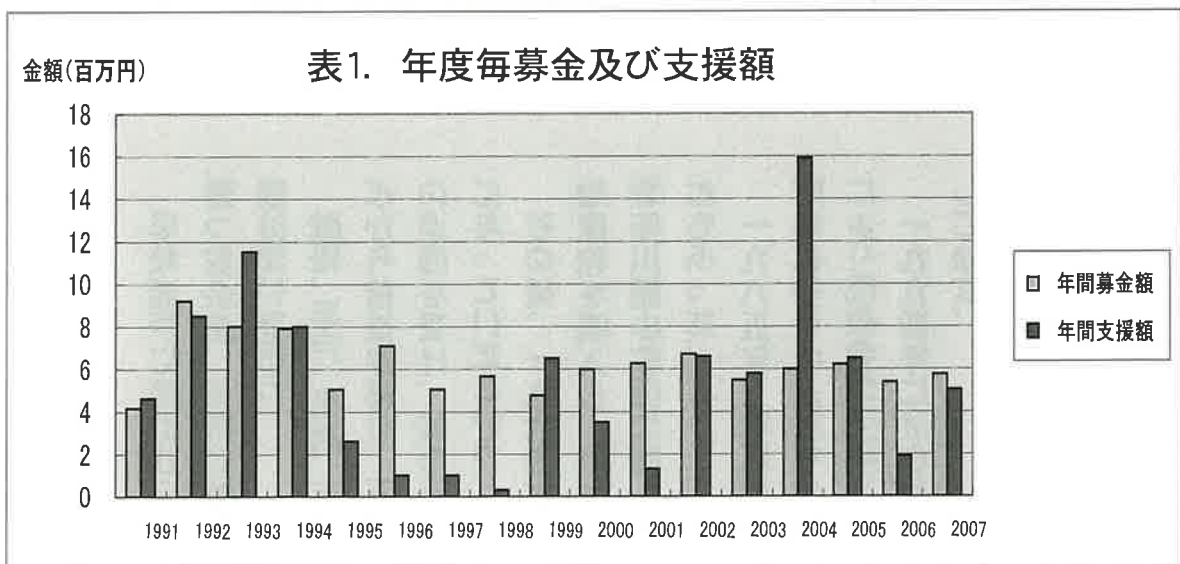
表2. 2007年度一菜募金への小教区参加状況

地区名	小教区数	参加数	参加率 (%)
中地区	6	5	83
南地区	13	8	62
北地区	12	7	58
佐世保	13	11	85
平戸	8	8	100
上五島	11	9	82
下五島	8	4	50

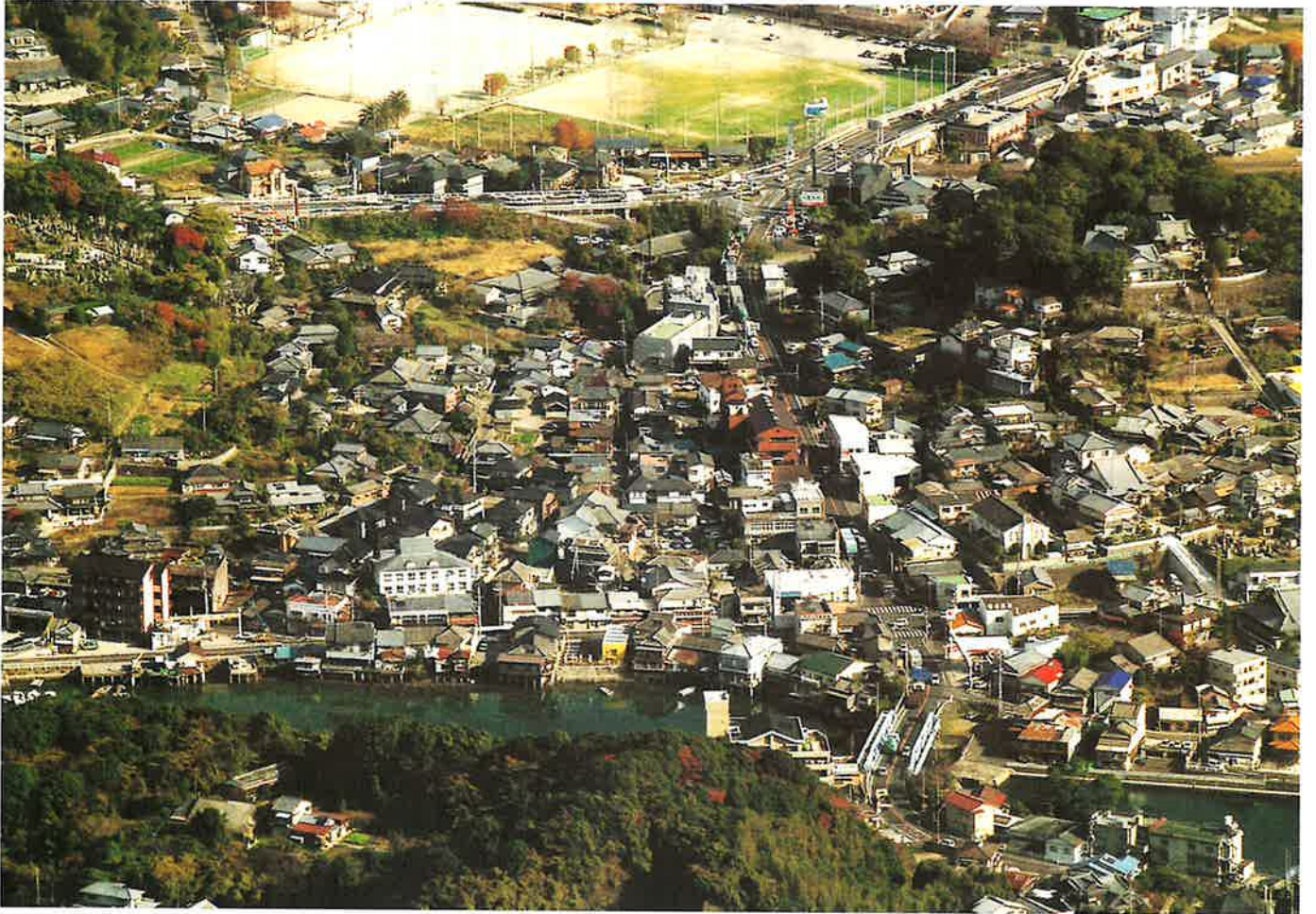
そういうわけで、まだこの活動に参加していない小教区も、この機会にぜひ検討していただき、愛の実践活動の輪に加わってほしいものです。（表2参照）

金額(百万円)

表1. 年度毎募金及び支援額



生活教会 の中の教会



早岐浦町教会

フォトプラン 山本 富夫

早岐

早岐瀬戸に臨む丘の上に建つ教会堂。寺院と並ぶ景観は想いを誘う。

戦後、平戸、黒島、五島などから信徒が移り、三浦町の巡回を受け、民家でミサに与っていたという。

その後、一九六四年、土地建物を購入し、献堂。十数年川棚小教区に属したこともあった。

一九八五年、教区や三浦町など多くの人たちの援助により現教会堂を建立。

一九九四年には小教区として独立。

教会堂は今、信仰の香を放ちつつ町並みに溶け込んでいる。